

ニホンザルにかかわる民間伝承にみられる動物観の構造

——大日川上流，杖・左礫地区の場合——

広瀬 鎮 財団法人日本モンキーセンター

ON THE MEANINGS OF ANIMAL FEELING CONNECTED WITH JAPANESE MONKEY LORE AMONG PEOPLE (Monkey Lore at TSUE and HIDARITSUBUTE Villages along the Upper Dainichi River)

Shizumu HIROSE, *Japan Monkey Centre*

I はじめに—山村生活者にとってのニホンザル—

地区住民にみられた動物観の特色をめぐっての調査と分析をニホンザルを中心に，石川県石川郡鳥越村左礫地区において試みた。1978年石川県石川郡鳥越村左礫には，明治26年7月5日生れの中田市太郎氏（85才）をはじめ，63才以上の男子老齡者が15名，そして明治21年10月15日生れ水口いとさん（90才）をはじめとした60才以上の女子老齡者20名が暮らしていた。高齢者をめぐる生活史記録の収録の必要性を今回の調査においても痛感したが，記録の集録は本村においても充分行なわれていなかった

* 日本モンキーセンター

表1 左礫村60才以上の男女高令者名簿（山本重孝氏調）

| 氏名 | 生年月日 | 性別 | 年齢 |
|--------|----------|----|----|
| 坂本 健次 | M42・9・28 | 男 | 69 |
| 澤口 辰巳 | M40・4・18 | 男 | 71 |
| 出口 市助 | M29・3・28 | 男 | 82 |
| 出口 仁助 | M37・3・2 | 男 | 73 |
| 森下 直祐 | M34・5・22 | 男 | 77 |
| 前川 石松 | M35・8・28 | 男 | 76 |
| 清水 治 | M43・7・7 | 男 | 68 |
| 吉中 喜助 | M44・2・10 | 男 | 67 |
| 川尻 岩松 | M36・8・4 | 男 | 75 |
| 中本 勝好 | M44・9・20 | 男 | 67 |
| 山岸 與之松 | M33・1・15 | 男 | 78 |
| 中田市太郎 | M26・7・5 | 男 | 85 |
| 中島 芳雄 | M36・7・3 | 男 | 75 |
| 小澤 勝 | T4・3・25 | 男 | 63 |
| 森下清太郎 | M41・7・8 | 男 | 70 |

| 氏名 | 生年月日 | 性別 | 年齢 |
|-------|-----------|----|----|
| 坂本 恭子 | T5・7・19 | 女 | 62 |
| 広川 いよ | M33・4・4 | 女 | 78 |
| 澤口 菊枝 | T2・7・2 | 女 | 65 |
| 出口 みな | M38・4・6 | 女 | 73 |
| 澤 ちよ | M44・12・19 | 女 | 67 |
| 森下 イト | M38・8・3 | 女 | 73 |
| 前川 初枝 | M45・4・10 | 女 | 66 |
| 清水 婦で | M44・1・1 | 女 | 67 |
| 川上 そよ | M27・11・25 | 女 | 84 |
| 江津 つよ | T3・3・26 | 女 | 64 |
| 川尻 すへ | M41・6・25 | 女 | 70 |
| 中本 つよ | T5・3・8 | 女 | 62 |
| 山岸 みな | M35・4・20 | 女 | 76 |
| 橋本 梅 | M35・2・18 | 女 | 76 |
| 中川 たま | M45・2・20 | 女 | 66 |
| 森下 ひな | M34・4・22 | 女 | 77 |
| 中島 いよ | M33・10・5 | 女 | 78 |
| 森下ふみ子 | T6・9・1 | 女 | 61 |
| 水口 いと | M21・10・15 | 女 | 90 |
| 南 ちよ | M23・8・15 | 女 | 88 |

た。本調査は、1976年（昭和51年）6月27日、左礫、広川敏之氏宅において、中田市太郎氏（明治26年7月5日生）、森下直裕（明治34年5月22日）氏、西村よそ松氏にお会いして、これらインフォーマントたちの少年期以降のニホンザルを中心とした野生動物とのかかわり、体験談の聴取をもとにニホンザルに対する住民感情の実態について考察を行ったのである。また、1976年現在において石川県小松市在住の岩本直太氏より、旧新丸村字杖（大日ダム工事により水没、廃村）における自然・生物との接触体験を聞くことができた。以下に報告と考察を行なう。

ニホンザルをめぐる環境指標性の考察のうえで、岩本直太氏の野生動物との接触体験は、貴重な情報資料を提供してくれている。ニホンザルの自然生活について、サル我的生活域に隣接して共に生活を営んだ山村住民の根底にある動物観、すなわち動物への対応感情の記憶は、急速に消滅しつつあった。その反面、強烈な印象体験としてニホンザルの野生を意識している人々も存在していた。ニホンザルの自然生活に対して山村住民の知識にはその修得度において片寄りがあるにせよ都市生活者の知識とは根本からことなっている。現在の左礫は、ニホンザルの生息地域ではない。そしてインフォーマントたちの少年期をすごした自然環境および社会環境とは著しく異なっている。とくに、戦後における物質文化の急速な高まり、昭和30年代の高度成長経済政策にもとづく近代化、過疎化現象の進行が著

表2 鳥越村国勢調査等人口の推移（1976年鳥越村村勢資料より）

| 調査の時期 | 調査の名称 | 世帯数 | 人 口 | | |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | | 総 数 | 男 | 女 |
| 大正9年10月1日 | 国勢調査 | 1,195 | 6,127 | 3,023 | 3,104 |
| " 14年 " | " " | 1,152 | 5,922 | 2,893 | 3,029 |
| 昭和5年 " | " " | 1,134 | 5,800 | 2,825 | 2,975 |
| " 10年 " | " " | 1,124 | 5,648 | 2,891 | 2,757 |
| " 15年 " | " " | 1,029 | 5,128 | 2,563 | 2,565 |
| " 20年11月1日 | 人口調査 | 1,195 | 6,092 | 2,792 | 3,300 |
| " 25年10月1日 | 国勢調査 | | 5,761 | 2,802 | 2,959 |
| " 30年 " | " " | 1,094 | 5,696 | 2,778 | 2,918 |
| " 35年 " | " " | 1,072 | 5,568 | 2,695 | 2,873 |
| " 35年 " | " " | 1,079 | 5,269 | 2,535 | 2,734 |
| " 40年 " | " " | 1,060 | 5,244 | 2,664 | 2,580 |
| " 45年 " | " " | 976 | 4,353 | 2,106 | 2,247 |
| " 50年 " | " " | 928 | 3,904 | 1,913 | 1,991 |

表3 鳥越村人口動態（1976年鳥越村村勢資料より）

| 年 | 自 然 動 態 | | | 社 会 動 態 | | | 総増減 (減△) |
|-------|---------|-----|--------|---------|-----|--------|-------------|
| | 出 生 | 死 亡 | 増減(減△) | 転 入 | 転 出 | 増減(減△) | |
| 昭和45年 | 45 | 44 | 1 | 102 | 221 | △119 | △118 |
| 46 | 59 | 55 | 4 | 126 | 210 | △84 | △80 |
| 47 | 49 | 47 | 2 | 120 | 207 | △87 | △85 |
| 48 | 58 | 49 | 9 | 115 | 235 | △120 | △111 |
| 49 | 52 | 50 | 2 | 109 | 176 | △67 | △65 |
| 50 | 51 | 46 | 5 | 118 | 217 | △99 | △94 |

資料 住民登録台帳

しい(表2・3)。とくに急激な社会構造の変化をもたらした、電源開発・道路開発、レジャー産業の進出にともなう諸開発、地方社会の過疎化現象により、人びとの生活面での価値体系を急激に変化させて、混乱を生ぜしめた。大日川上流域の電源開発事業にともなうダム建設と一部村落の廃村は著しく住民層の生活内容を変えていった。1976年の鳥越村村勢資料によっても1965年および1970年度の産業別就労者数の対比によってみると、第1次産業就労者の減少は著しいことがわかる(表4)。杖村は、水没

表4 鳥越村産業別就業者数(1976 鳥越村村勢資料より)

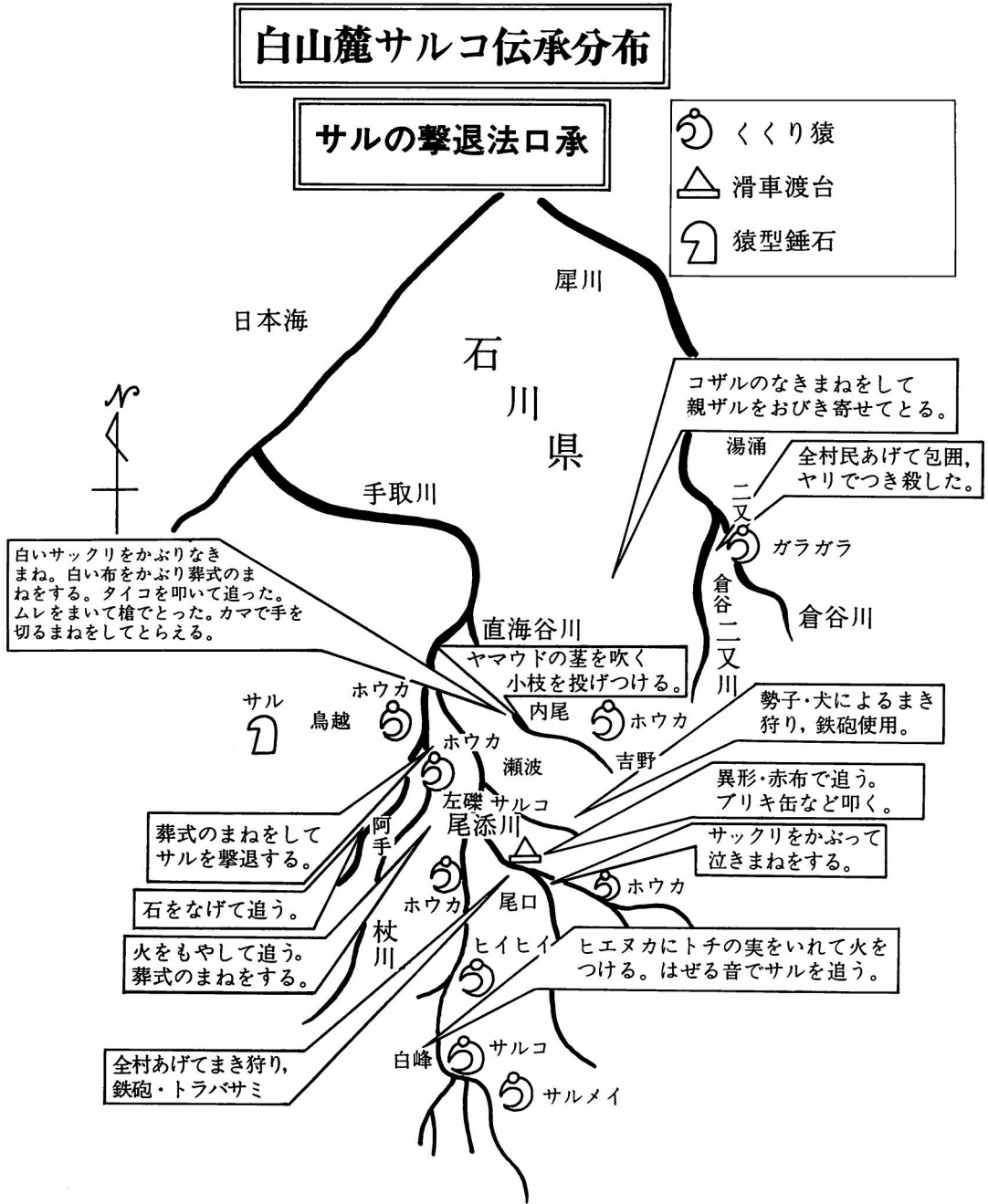
| 産 業 | 昭和40年国勢調査 | | | 昭和45年国勢調査 | | |
|--------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | 総 数 | 男 | 女 | 総 数 | 男 | 女 |
| 農 業 | 1,534 | 477 | 1,057 | 1,156 | 352 | 804 |
| 林 業 ・ 狩 猟 業 | 16 | 15 | 1 | 22 | 8 | 14 |
| 漁 業 ・ 水 産 養 殖 業 | — | — | — | — | — | — |
| 第 1 次 産 業 計 | 1,550 | 492 | 1,058 | 1,178 | 360 | 818 |
| 鉱 業 | 110 | 83 | 27 | 84 | 57 | 27 |
| 建 設 業 | 618 | 528 | 90 | 356 | 255 | 101 |
| 製 造 業 | 217 | 150 | 67 | 312 | 182 | 130 |
| 第 2 次 産 業 計 | 945 | 761 | 184 | 752 | 494 | 258 |
| 卸 売 小 売 業 | 129 | 62 | 67 | 149 | 89 | 60 |
| 金融・保険・不動産業 | 25 | 19 | 6 | 27 | 16 | 11 |
| 運 輸 ・ 通 信 業 | 187 | 163 | 24 | 134 | 113 | 21 |
| 電 気 ・ ガ ス ・ 水 道 業 | 50 | 48 | 2 | 53 | 48 | 5 |
| サ ー ビ ス 業 | 199 | 94 | 105 | 207 | 95 | 112 |
| 公 務 | 53 | 42 | 11 | 73 | 48 | 25 |
| 分 類 不 能 の 産 業 | — | — | — | — | — | — |
| 第 3 次 産 業 計 | 643 | 428 | 215 | 643 | 409 | 234 |
| 総 数 | 3,138 | 1,681 | 1,457 | 2,573 | 1,263 | 1,310 |

により一切の生活風習、生活の伝統的保存は現地ではみられなくなった。自然環境の変化も人間生活の変化と無関係ではありえなかったのである。前述の大日川上流の杖川、旧新丸村出身の岩本氏は大正期末(1925年)から昭和の初めにかけてニホンザルを見る機会は全くなかったという。だが、近年再び杖川域にサル姿がみられるようになり、これを同氏は自然の回復であると理解していた。また、大日川下流域に位置する今回の調査地区である左礫の村では、農作物に近づいたサルによる害をさけて藁に火をつけたり、葬式の真似をしてサルを追った。一方、若衆たちが組んでサル撃ちを楽しんだことも伝えられている。サル追いに関しては、明治時代には、左礫地区の人たちはサルを槍でとった。また「サルマキ」と呼ばれるサル追いの方法がこの地に伝えられていた。これは雪の深い時、サルが足に血を出すくらい追いに追って行く「おいつめ方式」であったが、インフォーマントたちは、「サルはいそいで追えば追うほど、走れない」ことをよく知っていた。だがサル撃ちは彼等の生業ではなく、村人のレクリエーションであった。杖地区では、「サルを捕るとタタリがある」と捕獲をめぐるの禁忌口承がのこされており、その理由は「サルが人に近いから」とされていた。サル捕殺を忌む気持が、どのていどこの地区で強かったものかは不明である。また、左礫では、田に入り込んできたサルには石を投げて追ったと口承されていた(図5)。

インフォーマントたちは、ニホンザルが狩猟獣として適当でないと考えており、彼等の間ではサル

広瀬：ニホンザルにかかわる民間伝承にみられる動物観の構造

第6図 白山麓サルコ(くくりザル)伝承分布とサルの撃退法口承



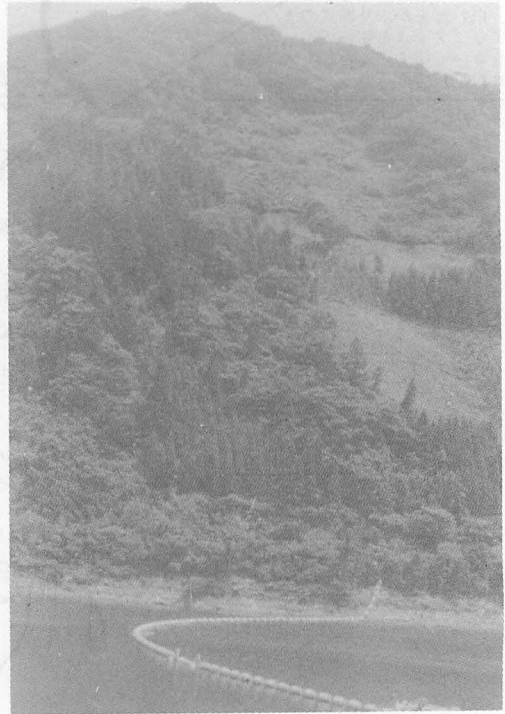
の毛皮の評価はひどい。サルは毛は薄く、色が悪いと述べている。左礫ではサルの異名としてヤエンボウ、エンコ、エンコザル、オヤジがあげられ、かつては「サル」という言葉は悪いことばであった。ニホンザルをめぐる動物観の特色ある形成は、地域社会と人びとの生業、そして地域集団の生活慣習などと深くかかわっているのである。サルを追った人びとの口承に、“川の深い谷に入りこんだサルは追いつめられると手をあわせるが、逃がすと今度は尻をかいて逃げ去る”があるが捕殺されたサルはみせしめに村中の柿の木に吊されたのである。

本報告では、次章において、左礫で見出されたホウカ、サルコさんとよばれたくくりザルをめぐるサルにかかわる造形モチーフの表出についてとりあげる。左礫では、1960年代後半に村社、武建社の旗柱が折れた時以来、また杖では廃村と人びとの離村を機会に、くくりザルが忘れ去られてしまっていたことが今回の調査で明らかとなった。しかもこのくくりザルの呼び名は、手取川、大日川水系に沿った村落ごとにその呼び名が異なっていたのである(図6)。左礫におけるくくりザルは、村の女性たちが、祭礼のたびにその直前につくったものであったが一体何のためのものかは明確に伝えられていなかった。ホウカという呼名をめぐるの白山麓地帯におけるその名称流布については、今後の調査対象としたい。いずれにせよ、今日までに判明した尾添川、直海谷川、瀬波川、大日川添いにくくりザルの名称が異なっていることから、村落共同体相互の文化交流の実態を、このくくりザルの名称のちがいかからも問題としたいのである¹⁾。地区住民間にみられるサルに関する文化モチーフへの関心の具体的なあらわれを示すものとしてとりあげられ、ニホンザルに対する動物観の史の変遷過程にもふれることが可能となるものと考えられるのである。

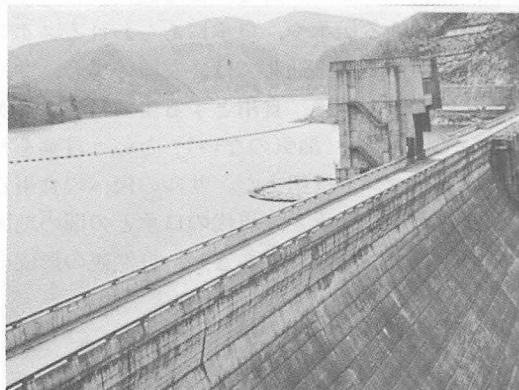
鳥越村は、村の誕生以来70年を経過し、地域社会の近代化が進められ、生活環境の整備も著しく進んでおり、自然環境に恵まれたなかにおいて高度な住民福祉が今日構想されている。

鳥越村は大正9年(1920)国勢調査時の、1,195世帯6,127人から、昭和50年(1975)の928世帯、3,904人と人口の減少をみている。大日川ダム建設により出現した大日湖(人造湖)は今や、自然景観の一つにくみこまれ、有効貯水量23,900,000m³の大日川ダムへの種々の期待が高められている(図7)。自然の生きものであったニホンザルをめぐる交雑した日本人の動物・自然観に現われたサルをめぐる民間伝承の性格について以下に考察を加えたい。(図8・図9)

第7図 大日湖の環境

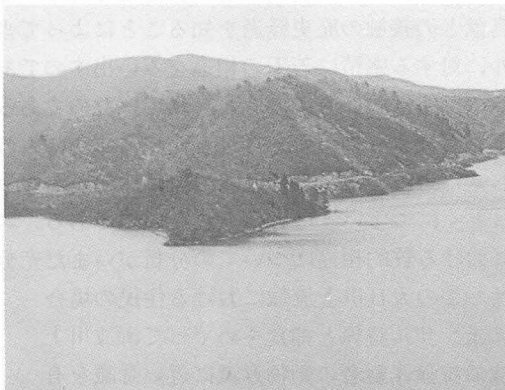


1) 広瀬 鎮「ニホンザル伝承分析よりみた白山山麓住民の自然観の特色」(『文部省・環境科学特別研究四手井班』日本モンキーセンター) 1978



大日川ダム

堤高59.9m, 堤長238.0m
有効貯水量23,900,000 m³
重力式コンクリートダム。



大日湖

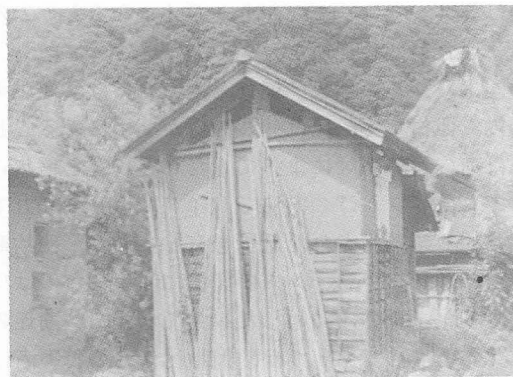
大日川ダムの建設により出現したこの人造湖は、訪れる人々を魅了している。

II 左礫地区住民に現われた動物観の特色

環白山麓帯地域の急速な環境変化にもとづく社会構造の変化によってもたらされた地域住民の生活意識、自然観の急激な変化、そして、動・植物その他自然に対する住民の価値観の著しい変化とともにニホンザルにかかわる民間伝承とくに、サルという言葉に関連した禁忌等は消滅しつつあると考えられる(図10)。今回の調査では4名の高齢者をインフォーマントとするにとどまったが、

ニホンザルをめぐる古伝承は左礫地区における特色とみられる。これまでの白山麓帯調査において聴取することのできなかったものをいくつか見出した。電源開発、ダム工事による水没村落の出現、共同体の解体、離・廃村、山村生活の現・近代化にともなう人びとの生活様式の変化は当然ながら物質文化、価値観の変動をもたらした。本論にとりあげたくくりザルのごとく祭礼時の装飾的役割をもった造形物がいかなるかわりを信仰に関して有していたかが忘れ去られていた例が、近年の価値観の急激な変化を示してくれていると考えるものである^[2]。また、左礫における住民にとっても過去の生活に登場した動物たちの姿も今日では伝承の世界のものでしかなくなってしまっていた。サルを鼠の作害獣として追った頃の「死んだものまね」、「葬式のまね」などといったサル撃退法が今日、いかに有効なる方法であったかは、実証する方法はないのである。鳥越地区における自然接触を不可避とする第一次産業従事者は、1955年以後急速に減少しており、ニホンザルに限らぬ動物知識

図10 左礫の家屋



2) 佐藤和彦『「人形」群から「猿っ子」へ—猿俣家の例をめぐって』(『高志路』第241新潟県民俗学会) 1976

や、自然認識、自然物価値観を衰退せしめていることが、推測できるのである。また過去における野生鳥獣との接触の歴史経過を知ることによって当地区住民における伝承や、口承にあらわれるニホンザルに対する感情に若干の相違をみい出すのである³⁾。とくに、本調査を通じては、左礫の場合、サル肉への関心は強いものと考えられていたのであるが、それはサルを捕獲、食用とする生活対応のなかに感じられるものと考えられるが、わずかに肉の味について「あさい(油気のない)」という言葉を集めたのみであった。サルの肉には匂いがないとインフォーマントは伝えた。サルの肉への食用意識はとくについとは考えられないのである。ニホンザルをめぐる伝承と、現代の口承との間の地区間における質的相違についての分析がまだ十分にすすめられていないのであるが、自然観の形成面では、この大日川上流域における住民の場合にはニホンザル狩猟と捕食をめぐる瀨波川上流域の狩猟体験者の動物意識に近い意識を有していたのである。(図11)

図11 大日川流域の家屋



すなわち両地区ともサルの狩猟の導入は、他地区からもたらされ、狩猟は住民の一部におけるレクリエーションとしてとり入れられたのである。瀨波地区のごとく「秋ザルは嫁に喰わすな」という云い伝えはみられなかったものの「サル肉はあさい味がする」という食肉口承を聴取したのである。

インフォーマントの年齢・職業、過去における体験、その他知識習修の過程の差がある

としても、左礫・瀨波の両地区においてみられたこのサルの食用の口承についてはさらに可能な限り聴込み調査を試みたいと考えている⁴⁾。それはサルをめぐる禁忌伝承をこえたサルの捕食へ働らいた社会の人びとの物質価値観の形成の過程を明らかにしたいと考えているからである。なお、サル以外にクマは3才まではうまいが5～6才になるとガムのようなものである。15貫(55kg)をこえないクマがうまいと云われていた。

今回は、サルの捕殺・捕食をめぐるのは、僅か4名のインフォーマントからの聴き込みであったが、その内、西村よそ松氏はサルの胃が薬用になることを知っていた⁵⁾。しかも、左礫におけるサルの捕獲自体は河内村の猟師によってもたらされたことと信じられていることは注目されるべき点である。しかもサル撃ちはイヌかけの方法で、イヌで追うやり方であった。森下直裕氏によれば大正期(1912-1925)にサルが2頭捕獲された記憶を有しており、明治期にはまだ槍を使用したサルのマキ取り方法を行っていた。インフォーマントの記憶に印象的なのはワッソー谷の入口で夜のしらみはじめた頃サルを捕獲し、それを柿の木に吊した場景であった。前述のごとく左礫地区にみられたニホンザルの捕獲はゲーム化したものであったが、他地区からの狩猟者によってひろめられたという、これは白山麓帯における人びとの生活交流の一端をも示してくれているのである。

インフォーマントたちは、農作物に近づいたサルの行動について、サルたちは、「アワ・ヒエ・イモなどを食べた。アワは手のひらにのせ、皮をとり、ふいて実をたべる。ホホブクロを使っている」等

3) 広瀬 鎮「白山麓におけるニホンザルとの出会いにおける人々の動物観」

(『石川県白山自然保護センター研究報告第2集』石川県1975)

4) 広瀬 鎮『猿』法政大学出版局 1979

5) 広瀬 鎮「ニホンザル薬用の文化史」(『びそん通信』No44 日本美術史研究会 1975)

サルを行動をこまかに観察していた。サルは、そこに気に入った食物があるとなると毎日のようにやってきた。大日川上流域の旧新丸村に住んでいた岩本直太氏によれば、大正末期（1925年）から昭和の初期にかけてニホンザルが村の周辺でみられなくなったことが明らかになったのであるが、同氏が村を離れ杖村水没後再びサルはこの地区に出没するようになった。

ニホンザルとの接触をめぐる情報の乏しい左礫においても、かつて住民は猿害をさけるために、火をたき、葬式のまねをしたという口承がのこされたり、前述のごとくサルが田に入ってくると石を投げて追った言い伝えが残されていて、サルとヒトとの厳しい対立の時代のあったことを示しているのである。

大日川流域住民とサルとの関係史のなかでも杖地区住民にみられた、「サルを捕るとたたりがある」と云い伝えられていること、そして「人に近いから」と忌まれる存在でサルはあったことは同地区の人びとの動物観の特色であるがサルの民間伝承として、「ヘイケノユミハリうで」という呼び名で、「サルうで（両ひじが腕を真直ぐに伸びてもびったりつく）」が左礫地区で伝えられていた。しかしとくにこの言葉がいやがられたものとは考えられないのである。なお、同地区においてサル名のつく地名を尋ねたが、サルガナ、サルガバンバ（ワッソ谷上部）の地名がのこされており、中田市太郎氏によれば、「サルガバンバとサルガナにかすみがかかると、もう雨がふらない」という口承がのこされていた。

III 左礫におけるくくりザルの伝承

左礫にある武建社の祭神は ヤマトタケルノミコト 日本武尊 ・ ヤマトヒメノミコト 倭姫命 ・ オトタチノサヒメ 弟橘媛 の三神と中田市太郎氏の記録帳にあった。武建社祭礼の大幟旗にスズとくくりザルがつけられていた。本調査時には社内祭礼具庫へ収納されているだけで、使用はこの数年来中止されていた。このくくりザルはかつて祭礼直前に村の女性たちによってつくられたが、その由来は伝わっていない。同地区では「ホウカ」と一般によばれている。山本重孝氏（吉野谷村文化財保護委員）、真野哲三氏（石川県白山ろく少年自然の家 主事）の両氏によって白山麓帯の村々によってくくりザルの呼名に地域差のあることが明らかとなった。白山麓の住民の居住した地区にはほとんど全域に流布をみたのではないかとと思われるくくりザルが、何故



武建社祭神の記録を語る
中田市太郎氏（右）と山本重孝氏（左）



ホウカとよばれるくくりザル
左礫武建社蔵

このように急速に関心が失なわれ、しかもその意味が失なわれてしまったのであろうか。山本・真野両氏によれば、大日川、尾添川にそってホウカ、瀬波川上流域にサルコ、サルメイとサルの言葉がつくくりザルが、そして手取川上流にサルコ、サルメイとサルという言葉がつく呼び名が伝えられていた。永田市太郎氏の記憶によれば左礫のくくりザルは、台風で旗竿がおれて、それ以後使用の習慣が止んだ。現在くくりザルは武建社御興蔵に収蔵されていて人目にふれることはない。以下にくくりザルをめぐる若干の考案を試みたい。

白山麓帯でいろいろな呼び名をもっているくくりザルは、我国民間口承にみられるサルの形態を表わした祈願物の一つであるといえよう。これは古くから各地において愛玩されたものであった。このくくりザルが民間信仰に関連して、招福、厄除け、安産祈願等、庶民の願望をになって巾ひろい流布と伝承をみたものであった。日本各地にくくりザルが庚申、山王等の民間信仰において根強いひろがりをもっていることを他所の調査で知見したが、これが、地域住民の文化生活と関連し、各種の変容をもたらしたことに着目して、筆者は特定地区におけるくくりザルの形態、呼称、信仰、対象等の調査を継続してきた⁶⁾とくに、石川県下手取川に沿った流域を中心としたくくりザル伝承の残留と、他地区における信仰表出の相違のなかから今後住民生活に内在する危機観、不安観、焦慮等災害対応の精神史を明らかにすることが可能でないかと考えている。くくりザルの調査は今日もひきつづき継続されているが、地区による伝承の分析は今後の問題でもあろう。

左礫の例にみられるごとく、祭の習俗も、さして重要と思われぬものは中止されてしまう場合などもある。年々サルに関する民間伝承の収録も困難となっている現状では高齢の情報提供者個々の聞き込みは緊急の要務である。

左礫より上流に位置する大日川沿いの杖村は大日川ダム工事によって水没廃村となった。同地区における礼祭事にかかわる大形くくりザルがかつて祭りに使用されていた事実は、旧新丸字杖村出身の岩本直太氏（現金沢市西泉1-47在）よりの聞き込みによってその存在が判明したのであるが、同氏はサルコの意味についてはほとんど知ることがなかった。しかしこの祭礼用のくくりザルの製法、その形の特色、顔、装飾に現われる日、月の形等も、同地区独特のものはいえない。一般に伝承されているごとく、この地区でもくくりザルは高齢の女性によってつくられ、幼児や小児の玩具としても与えられていた。しかし、祭りに果す役割り等は完全に今回の聴込み対象のインフォーマント間では記憶になかったのである。今も、かつて武建社の左右対象に立てられた幟にそれぞれ吊り下げられていたくくりザルの由来、製法等は残念ながら伝えられていないのである。サルコ伝承は今日、その古くからの伝承内容を伝えるものは少ない。だがそのなかであって、この種の文化物の継承への努力にみられる住民意識を明らかにしなくてはならないと考えている。

IV 呪術とサル形をめぐる

サルコの伝承にはサルを対象とした呪術伝承がかかわりをもっている。筆者はとくに兆・祭・占・呪をめぐり伝承の調査をさらに進めねばならないと考えているが、サルコには人の身体の健全を望む心意の期待にかかわる伝承が極めて多く継承されている。くくりザルの形態のもつ特色ある働きかけは日本人の「サル形・人形」によせた期待に集中的にあらわれる。とくにサルの形態のあたえたイメージ力が我国民族意識の中に根づよい定着をみた点はまことに著しい。だが例えば、サルコが赤色の布でつくられる場合が多くてもその色のもつ意味についての民俗学の立場からの説明が充分なされてきたとはいえない。サルをいかにえがき出すかは、美術文化史研究の課題ともいえるのだが、縄文

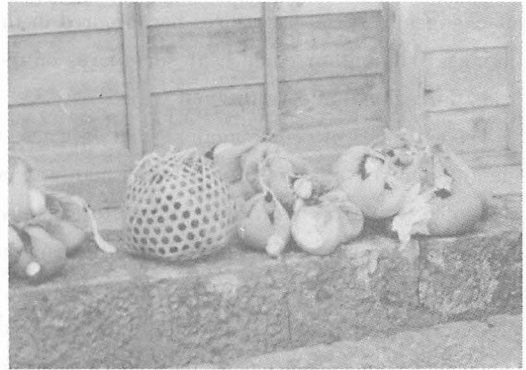
6) 広瀬 鎮「猿子伝承の流布①～③」1976（『モンキー』No.151～153、日本モンキーセンター）

期後期の遺跡から発見される偶像にみられるサルとその表象化におよぼす意識の推移についての考察をぬきにしてはサルコ人形との間に働く人意伝承の性格は明らかにされえないのである。

サルを通じて日本人が意識し、かつ期待した多くの心意伝承のうち⁷⁾、サル型といわれるサルコの姿に集中的にみられた心身にわたる民俗意識の実態についていまだ十分な資料をえていない。何故このような期待が人々の心にあられたのであろうか。日本の文化の発展の中に位置した潜在的なモチーフ観、イメージ作用のもたらした具象の世界を地区住民の生活史を背景として明らかにすることからサルコ伝承にあられたニホンザルへの期待観の内容を詳細にとりあげることが可能になるのではないかと考えている。今日残され、かつ継承されているくくりザルは、過去の日本の社会におけるサルコ⁸⁾の姿によせて期待したものの心意本質を明らかにする資料となるものと考えているものである。

今日、白山山麓地帯のくくりザルをめぐる伝承については、先述の山本重孝氏、真野哲三氏を中心となつて、白山麓の村々の実態調査を進めているが、赤い布でつくられ、人間に似せたサルコの由来については全地域の住民のほとんどがそれを知らず、関心も弱い。石川郡河内村・内尾地区においては近年大型のサルコが特別に作られていた。左礫を中心として鳥越、杖地区はホウカとよぶ一方、中宮、内尾地区もまたホウカ、と同じ呼名でよばれていたのであり、今後の調査によってこれ等の村々におけるサルコの伝承相互のむすびつきの背景としての生活の交流等が明らかになってくるものと考えられている。

左礫式建社のホウカと鈴



V お わ り に

1972年10月、下野、鳥越地区のサルコ⁸⁾の民間伝承調査を試みて以来、同地区への関心は大きくなっていったのであるが、吉野地区は幕藩時代において、幕府の巡士がやってくる時には土地の実態を知らせぬため「吉野十景」を指定して平地部を通さなかったと伝えられ、小松～三坂峠、吉野～鶴来⁹⁾を通じて白山へ行った。下吉野は中継点であり、憩の場所、加賀藩の観光の場所でもあった。鳥越村史によれば、古墳時代の出土物にキツネ、アナグマ、ツル、クマ、ノウサギ、サル、があげられており、サルは古くから鳥越地区周辺に住んでいたと考えられる。また、「吉野十景考」にも“寒猿叫”の記述がみうけられる。文久3年(1813)鶴来、白山村、下吉野、上吉野村等白山山麓の各村々の世情や、自然、生物にわたる記録を横山政和はその著「小松近郷巡見道之記」に残していたのである。釜清水村には猿鏡の記述があり、また「尾小屋村」の項に、野生ニホンザルについて以下の記録がみられる。「前略一尾山屋峠ト云上り一里阿手迄下ル一里又峠、間ヨリ三湖小松辺見ユ峠ヲ過正面ニ公領杖ノ高ノ崖見ユ比頃栗多シ、峠ノ右谷ノ向ナル高キ山ヲ大倉山ト基谷ヲ岩底谷ト猿多シ」とある。

7) 伊藤和彦：「人形」群から「猿っ子」へー猪俣家の例をめぐる (『高志路』第241 新潟県民俗学会) 1976

8) 広瀬 鎮・小野和子「白山麓のニホンザル伝承」(『はくさん』第1巻第2号) 1973 石川県白山自然保護センター

9) 横山政和 「小松近郷巡見道之記」1863

1976年6月27日の調査は、山本重孝氏、水野昭憲氏、真野哲三氏、松山利夫氏と石川県石川郡鳥越村、左礫において聴込みを行なったのであるが、本調査に先行して、岩本直太氏からは、離村前の杖村の自然および住民の生活を、そして下橋芳夫氏からは1970年代の大日川上流域の自然と野生生物の動向について予備的な聴込みを行なった。上記調査協力者への感謝とともに以下の情報提供者の方々の御協力を深く感謝申し上げます。とくに、左礫村の森下直裕、西村よそ松、中田市太郎、広川敏之の各氏にはお世話になり御協力ねがった。また、本調査は白山自然保護センター調査研究委員会、人文班研究の一環としてなされたものであり、同自然保護センター所長、星野宏一氏他多くの職員の方々に深甚の謝意を呈します。

Summary

On the 27th June 1976, author visited Hidaritsubute village of Torigoe-mura in Ishikawa Prefecture, and collected some informations on the traditional Animal Feeling in Japanese monkey lore. The tremendous changes of social structures had occurred in this area and people had already lost many old customs in livings. The author could hear some lores on monkey including hunting methods and medical uses of monkey in regional and traditional ways.

The attitudes of people against wild Japanese monkeys appeared around villages in old days show some antagonistic relationships between man and monkey.

People would try with their efforts to chase wild Japanese monkey from their own farmyard. The author could compare interesting differentiations on characteristics for Japanese monkey lore in the villages along the Dainichi River, with other villages.

"Saruko", monkey doll, made of clothes and cotton for religion and festivals, had many local names in several parts of the areas at the foot of Mt.Hakusan.

It is very important to consider the meanings of animal feelings and names of Saruko connected with people's lives and cultural communications. But to recognize the religious customs of Saruko was very hard in present situations.

Dweller's lives and animal feelings of people are so much in deep contacts, that four informants had been observed well with sharp eyes on wild Japanese monkey. In this paper, author reports about four points.

1. Special feelings to Japanese monkey in Hidaritsubute.
2. Attitudes and way keeping off wild monkey in the field farmyard.
3. Huntings, eatings and medical use of Japanese monkey.
4. Some religious informations from old informants gathered at Tsue and Hidaritsubute at this time, author analyzed the meanings of lores and standing points of villages mind for Nature and animals in historical changes.